

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

2020年、武蔵野市では今後10年間を計画期間とする「第六期長期計画」がスタートします。第一期の長期計画が策定されたのは今を遡ること約50年前（1971年）。後藤喜八郎市長の発意のもと、広い意味での市民や市議会、市職員といった、幅広い多様な市民の参加と対話によって計画を策定するという手法がとられました。これがのちに「市民参加の武蔵野方式」と呼ばれるものの始まりです。市民参加、今では聞き慣れた言葉かもしれませんが、国、都からのトップダウンの市政が当たり前だった時代、市民参加による計画策定は他の自治体をリードする新たな境地を切り拓くものでした。

第一期長期計画策定に携わられた市民委員は遠藤湘吉氏（財政学）、佐藤登氏（行政学）、松下圭一氏（政治学）、田畑貞壽氏（造園学・地域計画学）の4名。同計画に定められた施策を実行するに

「市民参加の武蔵野方式」 ～新たな市政の始まり



東京大学名誉教授
西尾勝さん

「市民参加の武蔵野方式」という言葉、一般の方にはあまりなじみがないかもしれませんが、しかし、戦後の市政を切り拓き、今日の武蔵野市政を形づくってきたのは、この「市民参加の武蔵野方式」による施策の進め方でした。今も受け継がれている「武蔵野方式」とは？ その始まりをご紹介します。

あたり、市民参加の市政運営をより着実なものとするために特に注力して進められたのが各種の市民委員会の設置です。最初に発足した「緑化市民委員会」の取り組みは、その後のモデルとなりました。

市民委員会によって 計画を作り事業を実施する

今回お話を伺った西尾勝先生は「緑化市民委員会への参加について、ご要望を受けた時にはびっくりしましたね」と言います。東京大学の助教授として行政学を専門とし、アメリカで都市再開発のための公共事業への住民参加についての研究に取り組み、帰国して間もなくのことでした。アメリカの自治体では市政への「市民参加」がごく日常的な事柄でしたが、日本ではまだなじみのないものでした。そのよう

な当時の状況もあり、「市役所が市民委員会を設置するという趣旨が、よく理解できませんでした。さらに聞く事業の計画に、『研究者としてではなく一市民として、市民感覚で関わってほしい。それが市民委員会だ』ということ、『これは長期計画で決まっていることだ』と説明されてもピンと来なかった」と振り返ります。最先端の研究者にとってもこの取り組みは新たな発見と苦労を重ねながらの歩みでした。

その緑化市民委員会の委員長は、第一期長期計画の策定委員の松下氏。西尾先生と同じ東京大学出身で、「お互いが武蔵野市民だと知る前にアメリカ留学時に知り合った」という間柄でした。「松下先生が委員長と聞き、ようやく問題意識が少し分かりました。それなら、何かの役に立てれば……」と市政に関わり始めたのがきっかけになりました。その後、西尾先生は長期計画への

関わりも深めていくことになります。

自分の意見が

市政に反映されていると

リアルに実感

このような経緯で「緑化市民委員会」が12名の委員によって1971年にスタートします。武蔵野を緑豊かなまちにするためにどんなことをしたらよいか。それぞれが意見を述べることから始まりました。

「皆さん市民目線の思いつきを述べたわけですが、松下先生によって活動プログラムとしてまとめられたものには、すべての意見が生かされ、どんな小さな意見も省かれたものはなかったのです。これには驚きました」

加えて、松下先生からは行政の仕組みが説明され、すぐに取りかかれるもの、来年、再来年以降の計画に組み込んでいくべきものと、プログラムが仕分けされていきました。お金がかからないものならすぐに実現できるだろうと取り組んだのが、今日も残る「武蔵野市民緑の憲章」でした。

「原案は私が書くことになりました。ところが皆さん、私を書いた原案に対していろいろと辛辣なことをおっしゃ

る。東大の先生的な扱いはまったくない(笑)。指摘を受けた部分はただちに書き直し、皆さんが納得する形に修正したのが『武蔵野市民緑の憲章』です。あの時の経験は、その後のさまざまな場面で役に立ちました」

「武蔵野市民緑の憲章」づくりに始まり、委員会から提案した構想は次々に実現されていきました。どんな小さな意見でも自分が提案したことが実現されていく。あるいは今後の検討事項として計画に残る。市民の意見を聞くことが市政の口実に使われるのではなく、自分の意見が実際に反映される。このことを実感すると自分の発言に責任を感じるようになり、議論もより活発に、慎重になっていったと西尾先生は言います。

「これが市民参加のあるべき姿であると同時に、市民を育て、まちを洗練させていくのだと実感しました。そして、この運営のサイクルが、『武蔵野方式』の根幹をなし、今もお継承されている姿ではないでしょうか」

市民により策定された

計画が実行されるために

その後西尾先生は、緑化市民委員会



第二期長期計画策定時の市民会議の1コマ。中央は西尾さん(1980年)

の委員長、第一期長期計画を見直す調整計画の策定委員(1975年)も務め、第二期長期計画策定委員会の委員長(1980年)に就任します。この間に市長は、後藤市長から藤元政信市長、土屋正忠市長へと交代していきました。

「10年というサイクルで進めていく長期計画が、首長が代わるとうまく進まなくなるといことが生じる。前の市長が決めたこと……という気持ちは、あるわけです。そうすると計画が実行されず本当にただの計画になってしまいます。実際にそうなっている自治体

の方が多い」

そこでこの「武蔵野方式」を根付かせるために西尾先生が提案したのは、長期計画を見直す調整期間を3年から4年に改めることでした。市長、市議会議員の任期は4年。計画策定の年と、統一地方選挙の年とが重ならないようにすると同時に、地方選挙で市長が交代した際には、その第一期の任期中に必ず計画を見直す機会が来るように改める。そうすることで、計画を民意と時代に合わせて変えられる手続きとす。こうして、計画に基づく市政運営の実施を担保する仕組みにしました。この4年ごとのローリング方式が、市長の交代にもかかわらず現在も引き継がれています。

「まちづくりに自分の意見が反映されたら楽しいでしょ?」とは常々松下先生がおっしゃっていたことです。市民が知恵をしぼってつくった長期計画は滞ることなく進み、実施されてこそ真の市民参加による市政と言えるのです」

「この伝統が続いた武蔵野市の『市民性』は特別なものであり、誇りです」と西尾先生は言います。

4月からの第六期長期計画のスタートを先人たちは見つめています。